

人の心に寄り添う 医療人になる

第16回 心を静める、相手を導く・2

心身統一合気道会会長
とうへい しんいち
藤平信一

昭和医療技術専門学校校長
さんどう まさる
山藤 賢 (インタビュアー)



藤平信一(とうへい しんいち)氏 プロフィール

1973年、東京都生まれ。心身統一合気道継承者。一般社団法人心身統一合気道会会長。慶應義塾大学非常勤講師・特選塾員。東京工業大学生命理工学部卒業。幼少から藤平光一(合気道十段)より指導を受け、心身統一合気道を身に着ける。現在は世界24カ国で約3万人が学ぶ心身統一合気道の継承者として、国内外で指導・普及にあたる。経営者、リーダー、アスリート、アーティストなどを対象とした講習会、講演会、企業研修なども行う。2010年からは、米国MLBロサンゼルス・ドジャース、2015年からはサンディエゴ・パドレスの若手有望選手、コーチへの指導にも携わっている。著書に『心を静める』、広岡達朗、王貞治との共著に『動じない』(共に幻冬舎刊)、『心と身体のパフォーマンスを最大化する「氣」の力』(ワニブックス「PLUS」新書)がある。NHK総合「助けて!きわめびと」に出演(2016年)、NHK総合「あさイチ」にスタジオ生出演(2017年)。

[前号(4月号)より続く]

自立に向けて

山藤：先生、人を動かす、人に寄り添うというのはこの心身統一合気道の中でも僕が感じるテーマと要素ですが、ぜひ指導や教育についての話もうかがってみたいと思います。僕もそうですが、先生も教育者という一面があります。医療の現場においても、技術の継承や人材の育成というのは大きなテーマの一つとなります。僕自身は、この連載の中でも何度か述べてきていますが、学生や職員と向き合いながら、いつも「自立」と「自律」について考えて

います。

僕は、学ぶ姿勢の最初の土台として、自分を律する「自律」を通して自分の足で立つ「自立」を、学生のうちに、大人としてできるようになってもらいたいという思いで学生教育を行っています。昨今は「自由」という言葉がもてはやされ、子どもにもそれを当てはめすぎて、自由ではなく「放縦」になってしまっている節があると思っています。特に人の命を預かるような医療の現場では、規律あつての自由ということが、とても大事になります。先日、先生とこの心身統一合気道会の会報誌で対談させていただいた際にも、先生とはそのような話で

[本連載の形式] 各界で著名な先生方への山藤先生のインタビュー(対談)にて、組織で働くこと、チーム内でのコミュニケーション、教育、臨床検査技師としての知識・技術の継承と向上、患者さんの心・命、自分の人生の役割などについてお話いただきます。対談のなかで、山藤先生が感じた医療とのつながりの部分を、心の「共振」ポイントとして解説を加えていただきます。



共感させていただいた部分がたくさんありました。この対談は「検査と技術」誌の4月号から3回の掲載なので、新人職員の方向けに、また指導者に向けても、先生がご指導されている心身統一合気道での自立についての捉え方、また先生が思われる教育について教えてください。

藤平：私は、全ての教育は自立に向けて行われるものと考えています。自らの頭で考え、決断し、その結果に責任を持つことが基本です。その土台として「自律」と「他律」の両方が備わって初めて自立できると考えています。ただ、現代においては他律の教育が主を占めています。例えば、法律や規則などは他律です。社会生活において他律は必要ですが、それだけでは「法律に違反していなければ何をやってもいい」という人間が出てきます。そこには自らの心を律する基準がありません。「不適切ではあるが違法ではない」と言って辞職に追い込まれた政治家がいましたが、あれこそまさに自律なき他律のみの典型でしょう。

山藤さんが自律というものを教育の中心に置いていらっしゃるの、いまの時代において最も重要なことだと思います。山藤さんの学校の取り組みで「学生の本分」というのがありましたよね。あれは本当に素晴らしいと思いました。

山藤：はい、ありがとうございます。僕と学生との約束事という名目で、5つありますが、「出席」「提出物」「挨拶」「ゴミを拾う」「素直であること」というものです。これは、やろうとさえ思えば能力などには関係なく自分でできることとして、学生の本分としています。規律というよりも「人としてのあり方」として行っているものです。こういったことを学生時代にしっかり身に着けて社会に出れば、職場や社会から本当に必要とされる、誰からも可愛いがら

れるような人材になると考えています。心身統一合気道の稽古に子どもたちがたくさん来ていると思うんですが、先生は具体的に、どのように自律を教えていますか？

藤平：習慣づけすることを大事にしています。言われてやるのではなく、自らやるようになることが重要で、例えば「履物をそろえましょう」というときも、まずはその意味と一緒に考え、指示や命令するのではなく、子どもたちと一緒にいきます。それを何十回、何百回と繰り返すうちに自然に身に着いてくるのですね。

山藤：なるほど、本当にそうですね。

「挨拶」と「氣が通う」ということ

山藤：うちの学校でも同じようなことをやっています。18、19歳の子どもたちを預かったときに、初めは全員バラバラなんです。育ってきた環境や、受けてきた教育が違うので。昨今の学校では、あまり挨拶や礼儀などはうるさく言いませんし、そこで僕が、「この学校では、挨拶を基本的なベースにしたい。で、なんで挨拶をすると思う？」と学生に聞くと、「部活の先生に言われた」とか「親にしなきゃいけないと言われた」とか、「大事って言われた」とか言うんですね。ある来賓の講師の先生で、「あなたがここにいるかわからないから、上司に向かって“います”というのが挨拶だ」って言う方もいらっしゃいました。なぜ大事かという解釈は色々あるでしょうが、決して自分の主張ではなく、「相手がそこにいると認めること」だというのが僕の挨拶の考え方なんです。相手がいないのに「こんにちは」や「おはようございます」って言っている人は、ちょっとおかしいじゃないですか(笑)。先に相手がそこにいることを認めているから挨拶をする、というのが素

晴らしいことなんじゃないかと思っているんです。その結果、相手は、自分が認められたと認証するんです。だから、「自分から大きな声で笑顔で挨拶をするのがいいんだ」と学生に言っているんです。

藤平：本当に大事なことですな。

山藤：先生、これは、氣を通わせているともいえるでしょうか？

藤平：そうですね。「挨拶する」という行為は「相手を認めている」わけですから、挨拶によって氣が通うのです。

山藤：高校時代にいじめに遭っていたり、不登校になっていた子どもをうちの学校で預かることもあるんですが、自分がそこにいと挨拶によって認めてもらえるから、そういう子も学校に居場所ができてきて、自分はこれでいいんだという自信が生まれてくるんだと思っているんです。

藤平：私たちは形のない「氣」というものを教えていますから、氣が通うという意味において挨拶をととても大事にしています。

私が先代の藤平光一の内弟子になったばかりのころ、挨拶について注意を受けたことがあります。当時の私は、誰かに声をかけられて初めて相手に氣づき、挨拶することがよくありました。そんな私を見て先代は、「お前はそれで挨拶しているつもりなのか」というのです。意味を理解できずにいる私に対して、さらに「お前がしているのは挨拶ではなく返事だ」と(笑)

山藤 & 編集室：なるほど！

藤平：挨拶とは「自ら氣を向けること」ですから、相手に氣づかない時点ですでに挨拶になっていなかったわけです。

ある中学校で講演をした際に、教育熱心な校長先生が講演前に生徒と保護者で別々にアン

ケートを取りました。内容はシンプルで、「家の中できちんと挨拶をしていますか」というものでした。すると「保護者の7割が“うちはきちんと挨拶しています”と答えた一方、生徒の7割が“うちは全然やっていない”と答えたそうです。全く数が合わないわけですね(笑)

山藤 & 編集室：(笑)

藤平：親御さんの感じ方と子どもの感じ方が違うのは、形だけの挨拶になって氣が通っていませんでした。例えば、お子さんが朝「行ってきます！」と言っているのに、親御さんが他のことをしながら「行ってらっしゃい」ということがありますね。声はかけていても、お子さんと氣が通っていない状態です。ですから、このような挨拶でも親御さんとしては「しっかりしている」と言われるのですが、お子さんから見れば挨拶としてノーカウントなのでしょう。

朝は忙しいことと思いますが、お子さんが出かけるときは、いましていることから手を休めて、お子さんの顔を見て「行ってらっしゃい」と声をかけることが大事です。

もともと、「行ってらっしゃい」という言葉には「行って」「戻っていらっしゃい」という意味が含まれています。氣が通った状態でお子さんに声をかけることによって、お子さんの無意識に「安全に行って戻って来る」と入るのです。

山藤：心身統一合氣道の技や姿勢でも、自分で「できる」って言うことができますが、「できない」って言うてできないのを日頃から感じています。これもやはり、言葉が落とし込まれている感じですね？ これはいわゆる「言霊」(ことだま)と言われるような言葉の力のような話にもなりますね。



藤平：自分が発する言葉、身近な人が発する言葉は無意識に入るのです。例えば、身近な人で10人くらいから「お前はだめだ」って言われたら、何となくだめな気になりますよね。

山藤：間違いなくだめだと思います。

藤平：一方で、同じ10人から「あなたならできる」と言われたら、根拠もないのにできる気になりませんか。この「根拠もないのに」というところが非常に重要なのです。物事の大半はやってみなければわからないわけですから、やれるだけの準備を万端にしたら、あとは「できる」と思って行うだけです。「できないかもしれない」という弱気が、本来できることすらできなくさせてしまいます。ですから、無意識のうちにどう捉えているかが非常に重要なのです。日頃から「無理だ」「できない」という言葉を不用意に発する人は、それが無意識に入ってしまうのです。無意識のうちに「できる」と思える状態だからうまくいくわけです。言葉は無意識に常に作用していますので、「言霊」という概念は先人の知恵なのだと思います。

山藤：そうか、まさに言霊ですね。あと僕は、先生のそういうところが大好きなんです。根拠もないのにというところが大事だって、なかなか大人は言えませんよ。ましてや先生のような立場の方が、正直根拠はないけどって…(笑)。先生がはっきりこう言えるのはすごいですよ。

藤平：100%うまくいく根拠など誰も持っていないわけですから(笑)

「気が通らない」とは

藤平：その一方で、いくら「できる」と口に出してもできないときはありますし、どれだけ努力をしてもうまくいかないこともあります。

考え方ややり方に誤りや無理があるときにそうです。日頃、根拠なく「できる」と思えるのに、「何かがおかしい」「うまくいきそうな感じがしない」と感じるとき、これを私たちは「気が通らない」状態と呼んでいます。

山藤：それは気づくってことですか？ 感じるってことですか？ 例えば、望んだからって誰でも100mを9秒台で走れるようにはならないですよね。こう気づくのは感覚ですか、感性ですか？

藤平：(編集室、三由に向かって)例えば、先ほどの呼吸動作ですが、「できそうな感じ」はありましたか？

編集室：いやあ、全く(笑)

藤平：そういうことです。ところが、これから基本的なことを学び、繰り返し訓練していくうちに、あるとき「あっ、これできそうかも」と感じる瞬間があるのです。それが「気が通る」ということで、心が静まった状態だと「気が通る」か「気が通らない」かがよくわかるのです。ところが私利私欲に目が眩んでいるときは、自分の中で適当な理由をつけてどんどん前へ行ってしまう。自分のことだけを考えていると気は通らず、世のため人のためを考えていると気は通るものです。

山藤：あっ、確かに100mを9秒台で走るのは完全に自分のためだけでしたね…(笑)

藤平 & 編集室：(笑)

山藤：確かに、世の中の役に立つか立たないか、その2つで考えてみるのはいいですね。僕が努力の大切さを話したりすると、「先生、何でもやればできるっていうけど、できないこともあるでしょ」って、よく学生が言うんですが、いまおっしゃったような判断基準はありますね。

藤平：世の中に役立つことって、皆応援してくれるものです。結果、成功しやすいのです。「世の中の役に立つためにここで学びたいんです」と言う人が来たら、貴重な時間を使って、色々投資してでも教えてあげたいという気持ちになりますね。それが、「私が成功したいから助けてください」と言う人であればどうでしょうか(笑)。誰も応援しようとは思いませんね。でも、実際にはそういう人が多いのです。

山藤：いやあ、先生にお会いして学ばせてもらってから、もっと若いうちから心身統一合気道のことを知っていればよかったのに、と思ったこともあるんですが、そういうお話を聞くと、そのときは学ぶタイミングじゃなかったのかもしれないと思いました。

藤平：私は大学の非常勤講師として指導しています。授業を履修する学生は20歳前後の若い人ばかりで、毎週私が指導しているのを見て「熱心に教えているけど、何を言っているかいまひとつわからない」という顔をする学生もいます(笑)。理解するための経験が不足しているのでしょう。それが社会人になり20年くらい経つと、「あのとき先生が言われたことが…」と、初めて理解できるようです(笑)。山藤さんの学校でも、当時は「なんで挨拶や掃除をさせられるんだろう」と思っていたけれど、20年経って、「あのときのお陰でいまの自分がある」と学生は感謝することになるのでしょうかね。

山藤：そうですね。長いスパンでものを考えたときに必要であることを、われわれ教育者は諦めずに与え続けなくてはいけないんですよ。読者の中で、経験を積んできた方、現在指導にあたっている方にも同じことが言えると思います。まさに「人の心に寄り添う」です。

道具にも氣が通う

編集室：先生は、アメリカメジャーリーグのロサンゼルス・ドジャースなどでもご指導をされてきましたし、心身統一合気道会には書家の方も通っておられるとお聞きしています。道具(パッドや筆)にも氣が通うのでしょうか。この雑誌の主な読者である臨床検査技師さんは毎日器械を扱っておられる方ですので参考になるかと思ひまして、「道具にも氣が通う」ということについて教えてください。

藤平：野球選手の場合、バットを持つ以上は、バットの先端まで氣が通っていないといけません。調子が悪いときは氣が滞って、バットと自分がバラバラになっています。先端まで氣が通っているときは、あまり「持つ」という感覚はなく、バットが自分の身体の一部になっています。

氣が通うとは、多くの方が思っている以上にずっと当たり前の状態です。例えば、赤ちゃんを抱いているときは、物を持っている感覚ではありませんね。自分と赤ちゃんは一体になっていて、氣が通っているのです。ところが、赤ちゃんを抱き慣れていないお父さんが抱っこしようとする、一体ではなくバラバラになっているので、赤ちゃんは不安を感じて泣き出します。

どのような物を持つにしても、その物と一体になっているときは氣が通いますが、その物をコントロールしようとした瞬間にバラバラになってしまいます。いま、臨床検査技師さんが器械を扱うと言われましたが、日頃から器械の手入れを入念にしている人や器械の状態を見ている人は、自分の身体の一部のように接しているのでちょっとした違和感も見逃しません。



「あれっ、なんか違うぞ」とわかります。車にしてもゴルフクラブにしても、日頃からしっかり手入れしているときは氣が通っているものです。ですから、器械や道具の場合も同じで、氣が通うということがあります。

山藤：例えば採血にしても、技術的に上手い下手はあるかもしれませんが、採血する人によって痛い、痛くないというのはあるじゃないですか。これも、注射器に氣が通っているか、いないかに関係あるのでしょうか？

藤平：そうだと思います。採血される側から見れば、氣が通っていないときはわかるのですね。今日は何かまずいぞ、と(笑)

山藤：確かに(笑)

藤平：技術は大事ですけど、技術の根底には氣が通うということがあるのだと思います。

山藤：物にも氣が通うわけですから、当然のことながら人にも氣が通うことが根底ですね。

藤平：そうですね。患者の立場からいえば、氣が通っているお医者さまは自分の状態を理解してくださるので、心から信頼できます。反対に全く氣が通っていないケースもたくさんありますね。言葉は悪いかもかもしれませんが、診察を受けるだけで氣分が悪くなるようなお医者さまの中にはいらっしますね。

山藤：うーん、残念ながらいますよね。

藤平：訪れただけでなんか気持ちいい場所があるように、検査一つ受けるのでも気持ちよく受けられるのは大切なことだと思います。氣が通った検査ということになるのでしょうか。

山藤：いまおっしゃったようなことが、この連載のタイトル「人の心に寄り添う医療人になる」という意味合いのことになると感じましたが、臨床検査技師に対して、あえて先生の言葉にするとどのようになりますか？

藤平：検査するということは人のデータを取るということで、もちろんそこには客観性が必要でしょう。しかし、その姿勢をそのまま人に対して当てはめると、人が単なる観察対象になってしまい、氣が通わなくなってしまいます。患者にとって、お医者さまや臨床検査技師さんに寄り添っていただけるかどうかは切実な問題であり、それがなければ、医療に対して患者は心から信頼はできないと思います。

山藤：いまおっしゃったことですが、まさに検体という言葉があります。患者の血液を検体と言いますが、法律上、検体は人から出たものなので“モノ”とされているんです。でも検体は、単なる“モノ”やデータではなく、人とは切り離せないんです。検体やデータの裏には必ず人がいて、そこに寄り添うというのがあるからこそそのデータのはずなんです。確かに、科学はそれを分離しますよね。

藤平：医療の現場には、科学的で客観的な姿勢と、山藤さんのおっしゃる“人の心に寄り添う”姿勢の両方が求められるのではないのでしょうか。それは車の両輪のような関係で、どちらがなくても車は前に進みません。そういった人材を育成するには、バランスの取れた教育が必要であり、それをまさに山藤さんが体現しようとされているのだと思います。

山藤：ありがとうございます。自分がやろうとしていることを深く理解できた氣がします。



道具に氣を通す話がありました。そもそも私たちは普段、自分の身体、その先端隅々まで意識して生きているでしょうか。私が自分の身



写真1 道具(木剣)の先まで気が通う訓練
(左：藤平信一先生，右：山藤賢先生)



写真2 気が通っていないと姿勢は簡単に崩れてしまう

体知を得る機会としてこの道場に通う中で、毎回まず、いい姿勢のためにつま先まで気を通すことを習います。読者の皆さまも自分の立ち姿を確かめてください。普通は、踵寄りに体重が寄ったり、つま先の力が抜けているのが実感として多いのではないのでしょうか。手の指先も同様で、普段、何かをするときに、指先を意識して感じて行動することは少ないように思います。医療の現場でも検査でも、道具を使うことは多いですが、その身体の先端のさらに先、道具の先まで、気を通わすということは、とても大事なことであるにもかかわらず、疎かにしているように感じます。

対談中にもありましたが、道具の手入れを怠らず、道具を大事に扱う、そして使うときにはその先まで気を通わす、心を向けることによって、ミスは減り、想いが伝わる。これは忙しいからこそ、医療の現場において大切にしたい所作と感

じました。藤平先生の所作は、何事においてもいつも本当に「美しい」という言葉が当てはまります。武道の達人の所作が美しいということ。それは終わりのなき「道」ということを追い求め、極めていく中で生じる、人間本来の姿のような気がしてなりません。私も未熟ながら藤平先生に師事し、道具に気が通う体感を稽古させていただいております(写真1, 2)。

(山藤)

「志」を継承する

山藤：先生、いまちょうど野球の道具の話も出ましたが、先生のお父さまは、野球の名選手であった王貞治氏、広岡達朗氏などをご指導された藤平光一先生で、心身統一合気道の創始者でいらっしゃいます。藤平信一先生が心身統一合気道を継承され、現在会長を務められていますが、先代から大きなものを継承するときに、何を考え、何を感じられたのでしょうか。この雑



誌の読者対象である臨床検査技師さんが、検査の技術を継承していく際のお手本や参考になるかと思ひまして、よろしければその心持ちをお聞かせください。

藤平：「継承する」と一言で言いますが、大事なことは「何を継承するか」です。多くの場合、その「何を」が不明瞭なのです。例えば臨床検査技師さんであれば、技術を継承しているのでしょうか？ 技術は日進月歩ですから、引き継いだ技術がそのまま変わらないはずはありません。

私も始めは「何を」継承するかをよく理解できていなかったのも、多方面で詰まることがありました。考えに考えぬいた結果、その何かとは「志」であることを理解しました。志という形のないものを継承しているわけです。それは簡単になくしやすく、変質しやすいのです。私が継承した当時、先代と私では人間性・合気道の実力・指導技能など全てのうえで比較にならないわけです。そんな中で、私が本当に引き継げるものなどなく、自信はなくなってしまいます。そうではなくて、「何のためにこれを行っているのか」とか「誰のためにこれを行っているのか」というマインドを引き継ぐことです。そこさえ正しく引き継いでいけば、人間性も実力も指導技能も、あとは日々積み重ねていくことでいずれは得られるわけです。私もいずれは先代以上にできるようになることを目指しています。私が長を務める心身統一合気道会は国際的な大きな組織であり、その継承は極めて難しいであろうと言われていました。大きな支障もなく、お陰さまで何とか現在に至っているのは、私が先代と同じ志を持っていて、そこに対して皆さん協力してくださるからです。

私の元には先代の事業を継承しようとする、

二代目・三代目の方が学びに来られます。そういった方々を指導して感じることは、組織であるとか資産であるとか、形のあるものを引き継ごうとするとうまくいかないということです。

編集室：いやあ、志とはすごいですね。なんて素晴らしいお答えだろうと、感心しました。

山藤：いまのお話は、臨床検査技師に限らず、リーダーシップを取っていく立場の人には本当に必要なことですね。質問の500倍ぐらいいく返していただきました(笑)

藤平：継承のときに先代から特に厳しく言われたのは、山藤さんの学校の方針と同じなのですが、「特別なことができて賞賛されるよりも、当たり前なことを当たり前にして信頼を得る人間になれ」ということです。先代は「これがお前が長として務まるかどうか一番重要なことである」と言っていました。特別なことをして注目を集め、人から賞賛されたいというのは人間誰しもあるではありませんか。しかし、そういった賞賛はいつきのことで、人を動かす力にはなり得ません。挨拶をするとか、約束・期限・時間を守るとか、お世話になったら「ありがとうございます」、迷惑をかけたなら「ごめんなさい」と言えるとか、清掃や後始末をするといったことがきちんとできる人が信頼されます。その信頼こそ人を動かす力になるわけです。その結果、物事は成功するのです。どれだけ高い技術や優れた能力を持っていても、信頼されない人間は絶対に成功しません。

私の場合であれば、ロサンゼルス・ドジャースの選手たちを指導したのは特別なことですが、重要なのはそこではないのです(笑)

山藤：確かに。実は僕も、自分で起こした事業もありますが、ある部分では父の設立した医療法人を引き継いだ二代目で、引き継いだとき

に、オーナーシップという形で引き継ぐことはできるけれども、リーダーシップって引き継がないなあ、と思ったんです。

藤平：そうですね。人間関係を引き継ぐことはできませんから。

山藤：そうなんです。うちの医療法人を引き継ぐときに、そこでずっと仕事をしてきた僕より年配の人たちに、突然現れた僕という個人の器を評価してもらうにはどうすればいいだろうと考え、まず当たり前のことを当たり前にやれない人間は誰も信用しないので、コツコツと、それこそ挨拶や片付けというところから始めましたね。全く先生がおっしゃる通りでした。気づくと、そういう人たちが味方になってくれましたし、一方で、離れる人は離れていきましたね。

藤平：離れていく人をコントロールすることはできませんので、それは仕方ないと思います。他方で、当たり前のことを当たり前にやるということはコントロールできるわけですから、その部分に手抜きがあってははいけませんよね。

山藤：先ほど技術の継承のお話が出ましたが、昨年対談した僕の同級生である歌舞伎役者の市川染五郎と技術の話をしていて、染五郎は、「昔から引き継がれているものはいまはビデオでも見れるので、技術に関してはもしかしたら過去最高レベルに高いことができるかもしれない。伝承ではなくて映像という見るツールもあるので。そういうテクニックは作れていると思うけど、それは観客には伝わらない」って言っていたんですね。例えは違うかもしれませんが、先生が心身統一合気道でご指導される中で、お弟子さんたちに本当に会得してもらいたい技術を伝えていくうえでのご苦労などありま

すでしょうか。

藤平：技術の伝達がうまくいく、いかないというのは、もちろん伝える側の問題もありますが、同時に受ける側の問題もあります。例えば、いまからどれだけいい酒を注ごうと思っても、それを受ける器にひびが入っていたら、溜まらないわけです。あるいは小さい器だったら、入るは入っても少ししか入らない(笑)。ですから、まずは器作り。それを私たちは「学ぶ姿勢」と言っていますが、学ぶ姿勢を最初に身に着けさせることが習得の最短ルートだと思っています。実際に、世の中では「何を学ばいいか」はよく教えますが、「どのように学ばいいか」はあまり教えません。継承、あるいは伝承においては、学ぶ姿勢を整えることが最も重要だと考えています。

物事の見方が同じでなければ、師匠と同じ時間に同じ場所で同じ経験をしているにもかかわらず、得られるものが違ってしまいます。

私が先代の内弟子となって間もないころ、先代の講演のお供で高知に行きました。500名くらいの経営者対象の講演でした。私はお供として、そつなくおしぼりや水を準備して「私は賢いお供です」という顔をしていたのでしょうか(笑)。帰りの新幹線の車中で先代から、「お前もこれで講演できるな」と言われて「はい？」とびっくり仰天したのを覚えています。「来週、小規模の講演が入っているから、お前が行ってこい」と。私は講演の経験もなく、実力も指導技能も未熟なので、自分には無理だと考えていました。すると先代は、「何を言っているんだ！ 今日やって見せたらう？」と言い、そのとき初めて自分の学ぶ姿勢が誤っていたことに気がつきました。私はいずれ指導者になるわけであり、自分が講演するという前提でお供



をしていなければいけませんでした。実際には先代のお世話係を務める意識でいましたので、せっかくの機会にもかかわらず何一つ見ていなかったのです。本来であれば、壇上に出る前の会場での待ち時間にどういう表情でいるか、壇上に上がってどのように自己紹介をするか、話す速度や間はどうか、視線をどのように使っているか、どういう順番で話を進めるかなど、先代は全て現場で見せていたのです。先代はよく「1回やって見せたことは1回でできるようになれ」と言っていました。実際には1回では無理なんですね(笑)。それでも、そういう意識で見ていると、たくさんのことに気づき身に着くのです。目的が明確でなく見てしまうと、何も得られないのです。内弟子になって最初に学ぶ姿勢を教わったお陰で、今日までやってこれたのだと思います。

山藤：先生、それはおいくつのころですか？

藤平：23歳でした。

山藤：先生、これは本当に素晴らしい話を教

えていただきました。いま話をうかがっていて、学ぶ姿勢を整えるという概念には目からウロコが落ちるような思いでした。誤解のある言い方になるかもしれませんが、僕は学生教育、職員教育において、修行という言葉を使っています。自分のやりたいことだけをやっていては修行にはならないし、身にも着かない。その修行や苦労を経て、自分が成長するということです。しかし、その修行に向かう姿勢によって、確かにその成果は大きく変わってきますね。先代はやはり厳しく、そして先生にとって偉大なお父さまであり、その「志」を継ぐという話の一端を垣間見ることのできるような素敵なエピソードでした。ありがとうございます。

(次号に続く)

本連載に関するご質問・感想などは、編集室
(e-mail: kensa@igaku-shoin.co.jp) までお寄せください。



山藤 賢(さんどう まさる)氏 プロフィール

1972年東京都生まれ。昭和大学医学部、同大学院医学研究科外科系整形外科学修了。医学博士。小学校から高校までは私立暁星学園サッカー部で活躍。東京都大会で優勝した他、全国大会にも出場した。現在は臨床検査技師教育に特化している昭和医療技術専門学校の学校長として学生の育成にかかわる傍ら、現役の臨床医として患者とも向き合う。医療法人社団昭和育英会理事長、横浜つづきメディカルグループ代表として医療機関を複数経営。日本臨床検査学教育協議会においては、副理事長を務め、2014年には学会長の任も務めた。また、なでしこジャパンのチームドクター(オリンピック、ワールドカップなど帯同)、東京都サッカー協会医事委員長(現)を務めるなど、スポーツドクターとしても活躍している。また、2013年の著書「社会人になるということ」(幻冬舎 刊)は、丸善日本橋本店にて、週間ランキング1位(ビジネス部門)になるなど、その活躍は、医療界にとどまらず、広いフィールドで注目されている。